

[報告] 会員からのコメント

『「佐賀県障がい者芸術文化活動支援センター SANC」の取り組み:文化芸術へのアクセシビリティ向上の為に』へのコメント

大政 愛(社会福祉法人安積愛育園 はじまりの美術館 学芸員)

厚生労働省では、障がいのある方の芸術文化活動に対して、より身近な拠点で支援が受けられるよう47都道府県に「支援センター」の設置を目指しています。2023年度時点では、43都府県44ヶ所に支援センターに設置されており、佐賀県でも2017年から設置され、活動が継続されています。本報告では、「文化芸術へのアクセシビリティ向上」を軸に、2020年度から2021年度に開催されたワークショップ(以下WS)である「創作体験WS」と「事業所訪問型WS」の事例が紹介されています。文化芸術へのアクセシビリティというと、ミュージアムや劇場等での鑑賞機会の拡充やアクセシビリティの向上という面もありますが、本報告では、佐賀県内の障がい者支援所等を対象にしたアンケートの結果をもとに、特に「芸術活動への一歩目をと踏み出すための取り組み」および「ネットワークづくり」に活動の重点が置かれていることがわかります。

障がいの有無に関わらず、大人になってからも自覚的に「日頃から表現をしている」という人はきっと少数ではないでしょうか。私が勤務するはじまりの美術館でも日々、展覧会に関連する形などで様々なWSを行っていますが、「筆を持つのは学生ぶり」「普段表現をしないから新鮮」という方も多くいらっしゃいます。SANCの取り組みで開催された創作体験WSは、「まずはやってみる」ということを大切に、素材や道具との出会いを楽しみ、そして様々な違いを知り、面白い様子が伝わってきます。障がいのある方の表現活動に携わる方たちが自身の引き出しを増やしていくためには、支援者などがまず一緒にやってみるとというのが第一歩だと思います。今回のWSでは、共同制作の手法もあわせて紹介されたことで、「自分の現場でもなにかできそう」という次の一歩にもつながると想像します。さらにこのWSでは、支援者のみならず、県職員、臨床美術士、弁護士など、参加者の職種の多様さに驚かされました。様々な人が同じ空間でともに手を動かし、交流を行うことはとても意義深いことです。

また、「地元でも開催してほしい」「定期的に開催してほしい」という感想も多くみられたことがきっかけで、WSの開催場所を広げていく様子がとても魅力的に感じました。佐賀県には20の市町があり、2020年度に佐賀市でWSを開催したときには、ほぼ佐賀市内の方からの参加だったそうです。その後、より多くの地域の方に参加していただけるように、SANCは様々な地域へと開催場所を広げていきました。特に地方では、公共交通機関での移動が難しい場合や、遠方でWSへの参加自体が難しい場合もあります。参加者にとっての“地元”の範囲でイベントが開催されることはとてもありがたいことだと思います。さらに事業所訪問型WSでは、利用者の興味関心の有無に関わらず創作活動に参加する機会の創出となり、とても大切なきっかけづくりだと感じます。

地域の声をしっかり受け止め、改善して、様々な場で人や出来事をつなぐハブになるこの動きこそが、支援センターのあるべき形の一つだと感じます。今後の広がりも、とても楽しみな報告でした。